

KOKOGAKU KENKYU

(QUARTERLY OF ARCHAEOLOGICAL STUDIES)

CONTENTS

SOCIETY NEWS

1

LETTER

Infectious disease and archaeology

HARUNARI Hideji (ed.)

2

ARTICLES

Haniwa production of central tomb groups of the monarchy in the Middle Kofun period

KIMURA Osamu

28

Reading Kobayashi Yukio's "Steam trains and folk houses"

HARUNARI Hideji

49

RESEARCH NOTES

Inter-site variations in stone figurines of the Early Jomon period and their causes

DENDA Yoshitaka

69

Balance scales of the Yayoi period seen from archaeological artifacts: Taking clues from Nakao

Tomoyuki's article

HAYAMA Shigehide

82

REPORTS, NEWS AND APPEALS

Mogi kofun: An experiment in site and artifact preservation and utilization, Part 1

The in-situ preservation of historic sites and open-air display of archaeological sites: Principles and history

TATEISHI Toru

12

At the intersection of cultural properties and SDGs: Based on an examination of the iron objects stored in the National Museum of Sudan

SEKIHIRO Naoyo

17

Report of attendance at the observation of the Nobono mounded tomb group, Andon'yama mounded tomb's outer bank, and Saki-ishizukayama mounded tomb

NAKAKUBO Tatsuo, MIYOSHI Motoki and SEINO Takayuki

22

"Regional Gathering to Reconsider and Protest against Japanese 'Foundation Day'" in Okayama

FURUCHI Hideharu

26

BOOK REVIEWS

MINAMI Kentaro. *Mirrors in East Asia and Yayoi society*

94

JITSUMORI Yoshihiko

94

TSUJITA Jun'ichiro. *The ancient history of mirrors*

97

ISHIMURA Tomo

AOYAMA Kazuo, et al (eds.). *Comparative study of civilizations in the ancient Americas: Past and present in Mesoamerica and the Andes*

100

SUZUKI Shintaro

NEW BOOKS

MIGISHIMA Kazuo (supervising editor), AOYAGI Taisuke, et al (eds.). *The archaeology of horses*

103

TANAKA Yuri

KABATA Shigeru. *An illustrated guide to the Maya civilization*

104

ICHIKAWA Akira

ARCHEO-FOCUS

Excavation and recognition of the large Han-style tomb at Phap Co mountain, Hai Phong city, Vietnam

HUANG Xiao-fen

105

Excavation of the site below the main building of the Hiroshima Peace Memorial Park, Hiroshima city

KUNOGI Keita

107

青山和夫ほか 編

『古代アメリカの比較文明論
—メソアメリカとアンデスの
過去から現代まで—』

鈴木真太郎

『古代アメリカの比較文明論—メソアメリカとアンデスの過去から現代まで—』は大著である。第1章から第3章まで全28節の論文と全体考察にあたる第4章、さらに10本のコラムが収録されており、56人の当世一流の研究者が執筆者として名を連ねている。含蓄に富んだ「はじめに」を含めると、総頁数は実に460頁にも及ぶ。簡素な文章ではあるが、本書評によって本書が読者諸賢の関心となることができるならば幸いである。

それでは本書の内容から簡単に紹介していこう。まず第1章では現在のメキシコから中央アメリカ諸国へ至るメソアメリカ文明が扱われている。序文で多様なメソアメリカ文明の概要が説明され、その後は日本人にも馴染み深い古代マヤ文明の代表的な遺跡の一つ、セイバル遺跡が議論の中心となる。黒曜石製石器の分析を中心とした考古学研究に始まり、遺跡周辺にある湖の底から採取された堆積物による年縞の研究や、湖底ボーリング調査や遺構発掘によって得られた古代の花粉や木片の研究、さらには航空機レーザー測量に関する研究が揃えられている。こういった先進理科学との共同研究では、あまり一般に馴染みのない専門分野に関する「どういう原理で、どういうことがわかる技術なのか」という教科書的な導入文がそれぞれしっかりと用意されているのがありがたい。

古代マヤ文明に関してはさらに多くのページが割かれている。近年発掘が進んだエル・パルマール遺跡における饗宴をテーマにした論文や、マヤ文明圏では周縁部に相当するチャルチュアバ遺跡、サン・アンドレス遺跡での地域的多様性に関する論文、さらにはメソアメリカの南端で南米との中間地域にあたるニカラグアにおける移民について

の論文が用意されている。広範な地域で、より多様なテーマから古代マヤ文明の実像に迫ろうという試みであろう。

もちろんメソアメリカ文明は古代マヤ文明だけではない。メキシコ中央部の巨大遺跡テオティワカンとその勃興に深い関わりを持つトラランカレカ遺跡も丁寧にカバーされている。特にトラランカレカ遺跡に関する論文では筆者自身の発掘データとテオティワカン遺跡、チョルーラ遺跡のデータを比較検討しながら、メキシコ中央高原における諸都市の栄枯盛衰を自然災害とピラミッド建築という独自の視点から解き明かしている。

続く第2章では南米アンデス地域でも南部、特にナスカ台地とその周辺に焦点を絞った論文が紹介されている。こちらも広く学際的な研究論文が用意されており、まずは考古学的な側面からの論文が並ぶ。世界的にも有名なナスカの地上絵に関して、これを古代の道として解釈する視点が提供されると、続いて地上絵を描いた人々の社会や生活に迫るため、ナスカ台地北側のインヘニオ谷に位置するベンティーヤ遺跡の詳細な発掘調査が報告される。その後、同谷全体を俯瞰した意欲的なセトルメントパターンの研究が提示され、アンデス文明全体の展開と連動した視点が示されるのである。評者はアンデス考古学について全くの门外漢であったが、序文にわかりやすい概説があるので、抵抗なく知見を新たにすることができた。

その後はより学際的な研究が紹介されていく。現在のナスカ台地において風が引き起こす岩屑の移動と地上絵の保存に関する研究や、当地の利水機構であるプキオシステム（地下トンネルで取水し、暗渠や開渠で溜池へ導いて、畑ごとに溝を作つて配水する仕掛けのこと）の起源に関する研究、さらには古代のミイラや人骨の安定同位体という特殊な値を分析して当時の食糧事情や人の移動までも解明しようという研究が報告されている。特に安定同位体の論文は、メソアメリカでの堆積物の研究と同様、安定同位体分析の原理と基礎をわかりやすく、且つ簡潔に説明している。安定同位体分析という領域に关心を持つ読者であれば、新大陸考古学への興味の有無にかかわらず一読の価

値がある論文だろう。

ここからは一見すると古代文明とは関係のないような分野の専門家による論文が続く。認知心理学、鳥類学、そして情報科学である。地上絵を道として歩いた場合、そのモチーフがどのように認識されるのか。地上絵で描かれる鳥類には現在のペルー領内には存在しない鳥（特徴が一致しない）が描かれているが、それは何故なのか。直線の地上絵が複数交差するラインセンターの配置には情報科学におけるネットワークという視点からなにか理由が見出せるのか。それぞれに意欲的で刺激的な問い合わせ明かされていく。

第2章の最終節は放射性炭素年代に関する研究者の奮闘を記録した論文である。本書の重要なテーマとして挙げられている「精緻な編年」の肝を担う論文であり、炭素放射性同位体分析のイロハをわかりやすく導入しながら、暦年較正の「ものさし」が不在の南米大陸で年代を測定する困難さと、研究を通じて少しづつ見えてきた突破口が紹介されている。

第3章では第1章、第2章で中心的な役割を果たした考古学から離れ、より歴史学的、文化人類学的な論文が用意されている。古代アメリカ文明は16世紀のスペイン征服とその後の苛烈な植民地政策という人類史上稀な難局を経て、変容を続けながらも、現代まで生き続けている。この現象を「過去の資源化」という資源人類学の理論的な枠組みに沿って議論するのである。

まず先住民自身が自らの過去を「資源化」した先住民クロニカ（史料）の研究がメキシコ中央高地とペルー北部海岸を舞台に紹介される。メキシコでクロニカの本質を「征服後のある時点で先住民の血を引く人物が過去を解釈し、描写したもの」と見定めると、ペルーのケースでは先住民たちが自らの目的のため「支配者（スペイン人）の世界観に沿って行動」し、且つその世界観の中で都合の良いように「先スペイン期の過去の利用と微修正」を繰り返しているという指摘がなされている。流動的なアイデンティティという人類学的な観点から興味深い指摘であろう。

現代における古代文明の資源化については、非

常に多くのケーススタディが紹介されている。チヨルーラ遺跡では遺跡の観光テーマパーク化をめぐる政府と地域住民の対立が報告され、一方で同じくメキシコのチチェンイツア遺跡では、マヤの民族性・伝統文化の訴求よりもむしろ多くの観光客が訪れる遺跡公園内での商売継続に重きを置く先住民商人の現実的な選択が報告されている。

ペルーでは教会に奉納される聖母像の服飾品に認められる先住民的なモチーフと、そういった非キリスト教的な多様性を敢えて認めることで聖母信仰により多くの信者を取り込みたい教会側の思惑が重層的に議論される。またグアテマラでは先住民織物の特徴的な意匠の著作権をめぐる先住民女性グループの闘争の記録が紹介され、さらにチリでは先住民医療であるマプーチェ医療（深い薬草の知識で知られている）が公共サービス化したこと、先住民文化が先住民自身の裨益よりもむしろ非先住民やチリ国家の財政状況改善に利用されている現状が報告されている。チリのケースではこういった現状が過去にスペイン副王領が行った先住民の土地摂取・集住政策「レドウクシオン」と重ねて議論されているのも興味深い。

エクアドルでは教育における古代文明、先住民文化・言語の資源化も報告されており、最終節ではラテンアメリカ各国の博物館展示を比較することで、各国政府が自らの過去をどのように捉え、また政治的に見せようとしているか、を評価する意欲的な研究が紹介されている。

第4章ではいよいよ「古代アメリカの比較文明論」が展開される。古代アメリカ文明を対象に精緻な編年に基づく横軸の地域間比較研究を行い、古代文明から現在まで連続と続く先住民文化の変容を縦軸に議論しようという壮大な試みである。この大きな目標に到達するため著者らはまずメソアメリカ文明とアンデス文明との類似点（共通性）と差異（独自性）を見定める。紙面の都合上、これらをすべて列挙することはできないが、自然環境や定住の時期、農耕開始と土器出現の関連、食糧文化、国家の形など実に多岐にわたって共通性と独自性が定められている。そこからメソアメリカにおける「土器→公共祭祀建築→農耕定住→文

字→王都」、そしてアンデスにおける「公共祭祀建築→農耕定住→土器→王都」というそれぞれの社会変化の過程が丁寧に描き出されるのである。

さて、ここまで本書の内容を簡単にまとめつつ、主に見どころなどを紹介した。結論として非常に優れた、古代アメリカ文明の初学者、専門家のみならず、広く外国考古学、日本考古学を問わずあらゆる人類学者の必読書となりうる良書である。本書評では10本のコラムには触れることができなかったが、アンデス文明で先土器時代に相当する形成期早期のコトシ遺跡、ハンカオ遺跡の発掘報告や、現代メキシコ都市部における古代文明の恣意的な資源化に関する報告、本文でも触れた「レドゥクション」の裏に見え隠れする先住民文化的要素の報告など、一本一本がとてもコラムに収まりきらない多くの知見を含んでいる。

しかし、このまま手放して「素晴らしい」だけでは、やはり書評としてあまりに手抜きである。いくつか気になった点もあったので、簡単に触れておきたい。

1) メソアメリカ文明、アンデス文明をそれぞれあまりに簡略しすぎではないか。研究プロジェクトの成果である以上、プロジェクトメンバーが専門とする研究領域、地域によって内容に一定の偏重が生まれるのはやむを得ない。しかし古代アメリカ文明はあまりに多様で広範である。プロジェクトでカバーしきれなかった地域や領域についても、ごく簡単な言及だけで切り捨ててしまうではなく（言及すらされないものある）、それぞれの専門家をプロジェクト外からも国籍問わず招き入れ、新たな章を追加し、その上で比較文明論を展開すべきだったのではないだろうか。

2) いくつかの章で個人的な主観が学問する姿勢に勝ってしまっているのではないか。学術書である以上、引用文献には一定の分量、精度を求めなければならない。特に複数の説が議論され定説が存在しないテーマなどについては筆者個人の意見だけでなく、意見に沿わない説も少なくとも紹介、引用すべきだったのではないだろうか。

3) 「古代アメリカの比較文明論」は本当に達成さ

れたのだろうか。460頁以上にも及ぶ本書だが、大部分は相互引用もほとんどないそれが独立した論文であり、古代アメリカの比較文明論が実際に検討されるのは第4章のわずか29頁だけである。そのうち10頁程度はまとめに相当する内容に紙面が割かれており、6頁程度でメソアメリカとアンデスの類似点と差異が列挙されている。しかし、この列挙の根拠となっているのも概ね既報の論文や書籍であり、専門家にとってはいわば常識の内容である。本研究28節の論文群から得られた新たな知見とは言い難い。残るのはわずか13頁程度だが、その中でもさらに8頁程度で「メソアメリカの社会変化の過程」と「アンデスの社会変化の過程」がそれぞれ別個に検証されており、むしろ旧大陸文明との比較が目立つ。つまり400頁以上にもわたって個性の強い論文が集められたわりに、究極の目標としてこれらの個性を取りまとめて壮大な比較文明論を展開するとなると、実際はわずか数ページなのである。これだけの大著の結論としては、少しさびしい感想が否めない。やはり、それぞれの専門家がそれぞれの節でより踏み込んだ地域間の比較検証を行い、第4章ではそこから得られた新たな知見を総合して、より理論的なレベルでの議論を目指すべきだったのではないだろうか。

もちろんこれらは一末端研究者の「気になること」である。おそらくは些末な、的外れな指摘だろう。しかし、あるいはもしかしたら核心の、少なくとも一部をついた指摘なのかもしれない。そこで考古学研究会会員諸賢にはぜひ本書を手に取ってみてはいただけないだろうか。諸賢それぞれの多様で専門的な視点から、本書の価値を検証していただきたいのである。その先でもし古代アメリカ文明をめぐる考古学に少しでも興味関心を抱いていただけたなら、それはきっと全ての古代アメリカ研究者にとって何よりの幸甚となるはずである。

(京都大学学術出版会 2019年 A5判 444頁 4,200円+税)